



N 今回の終点は古刹『東光寺』。裏山には戦国時代の山城跡が残る。



G 中里宿の本陣跡は、造り酒屋になり、魚屋の吉村家。

コース17 市役所から佐々まで

1:25,000
国土地理院地図使用

ウオーキングメモ

伊能忠敬が測量

「七十に近き春にぞ あひの浦
九十九島をいきの松原」
文化9年(1812)、伊能忠敬は『大日本沿海輿地全図』を作る測量のため佐世保を訪れている。この歌は忠敬が九十九島を歌ったもの。
測量隊は二手に分かれ、忠敬は針尾島を一周して佐世保湾沿いを測り、別の隊が平戸往還を歩いて測量している。写真は松浦資料博物館に所蔵されている九十九島が描かれた『伊能図大図』。

ウオーキングメモ

昔、川には橋がなかった

市内を通る平戸往還はたびたび川を渡っているが、その時代は防衛のために、藩がほとんどの川に橋を架けなかった。「飛び石」を渡っていたから、水高が増す雨のときは難儀しただろう(広田の小森川にだけ、橋が架かっていたようだ)。
『西遊日記』を残した若き吉田松陰が平戸遊学のとき平戸往還を通っている。相浦川を渡るときは小雨模様で、飛び石を用心して渡ったことだろう。



M 口石一里塚跡には、昔のように榎の古木が茂っていた。



L 道を下ったら木場川。その流れにメダカを見つけて子ども気分。



I 半坂の一面に昔のまま残る往還。草に隠れて見失いそうだが。



K 半坂峠を登り切ったところは、駕籠立てい坂。この長い背負った坂を、坂を降り切ったところ、木場川の流れてメダカを見つけて喜んだ。やがて『口石一里塚』の跡、榎の古木が立っている。



H 石垣沿いの細い道が国道の左手に続く。



F 吉岡町の団地先を過ぎた先には、大道堂がある。堂の辺りは昔のどかさだ。



C 三本松茶屋跡から、大正橋の方へ降りて行く。

I 嘘越から半坂まで急勾配の道。振り返ると、遠くに九十九島が見えた。



B 堺木に残る赤レンガの減圧井。



D 春日神社は、平戸往還沿いにある。



B 懐かしい竹細工の店があるが、その少し先で線路の方から来ている平戸往還と合流する。



A 俵町の裏通りは昔は表通りだった。

水道局の裏、西光寺の門前を通る往還をスタートして北上する。まず城山町から俵町にかけては市街化でほとんど『平戸往還』が消えている。それでも俵町の裏手には黒板製作所や老舗の和菓子屋があつて、なんとか街道の名残がある。そこから線路向こうの旧道に続くのだが、元禄年間の古地図に書かれている『三本松茶屋跡』の一里塚は、大正橋の上の方にあつたという。そこから線路を横切つて、現在の国道に沿つて続いていた。

春日神社の前を通り堺木へ。ここには明治32年建造の岡本水源地から水を引いた『減圧井』が残っている。西蓮寺の下をまわるように相浦川沿いに進む。地名の『左右』は、平戸から見て左側に大石があつたからという。やがて吉岡町の希望ヶ丘団地の中を歩く。このあたり道は驚くほど真つすぐ進んでいて、中里宿へと続いている。本陣があつた中里宿は、佐世保が海軍鎮守府開設で激変する前まで、相神浦郡代役所が置かれ、行政の中心であつた。

中里で直角に折れて相浦川を渡る。古くは飛び石があつた。国道の左に石垣沿いの細い道があつて、やがて国道を渡つて嘘越から半坂まで真つすぐに上っている。かなり急勾配の道である。振り返ると、遠くに九十九島が見えた。この辺りは戦国時代、平戸松浦氏と相神浦松浦氏の間で『半坂の戦い』があつたところ。

坂を登り切る手前に、昔のまま平戸往還が草に埋もれてあつた。それを上ると半坂峠の『駕籠立て場所』だ。平戸の殿様の行列も駕籠を置いて一休みした場所だ。そこから一気に口石まで下りていく。人家もほとんどない。坂を降り切ったところ、木場川の流れてメダカを見つけて喜んだ。やがて『口石一里塚』の跡、榎の古木が立っている。

佐々町の国道沿いに出ると車の音がうるさくて、これまで歩いたのが静かな山の中だな、と改めて感じた。

三柱神社の少し先に『東光寺』がある。寺の裏山には中世山城の跡が、『半坂の戦い』には東光寺の僧兵も参加した。街をぬけ、野や山を歩いた楽しいウオーキングだった。

街と野と、川と峠を越えて平戸往還